

習熟度別クラス編成に関する考察(2)

堀江 美智代*, 田原 良子*, 森永 初代**

A Study about Streaming English Classes (2)

Michiyo Horie*, Yoshiko Tahara* and Hatsuyo Morinaga**

学力多様化への対応として、習熟度別クラス編成が実施されるようになった昨今、英語教育をより充実したものとするためには、習熟度別クラス編成を総合的に分析、考察する必要がある。鹿児島純心女子短期大学英語科では、2001年度前期、英作文と英会話のクラス編成を2段階習熟度別編成から3段階編成に変更した。記名式のアンケート調査を実施し、3段階習熟度別クラス編成を、学習に対する影響や意識の変化という面から調査・分析した結果、全体的には英作文及び英会話のどちらにおいても、3段階編成が概ね効果的に作用していることが分かった。しかし、英会話においては基礎クラスの評価が相対的に低く、3段階編成が必ずしも好影響を与えているとは言えない。TOEIC結果の分析から、学生のプレースメントの妥当性に疑問が持たれ、これが基礎クラスの評価の低い原因ではないかと推測される。また、両科目において、英語力上達の要因として「教師」、「学習内容」、「自分の努力」を学生が重視していることが分かった。

Key words: [アンケート調査] [英語教育] [仮説検定] [習熟度] [クラス編成]

(Received November 5, 2001)

1. はじめに

文部科学省は、2002年度、「学力向上フロンティアスクール」と名付けた公立小中学校を、全国で1000校指定することに決めた。これは、2002年4月から導入される新学習指導要領が目指す「基礎・基本を徹底し、自ら学び、考える力」の育成が目的で、教員を増員し、少人数による習熟度別授業を実施する計画である¹⁾。

全国の国公立大学の学長に対するアンケート結果²⁾ (2000年度実施、過半数の320大学が回答)によると、学長の93%が大学生の学力低下を実感し、特に高校までの基礎学力不足(193大学)や一般教養・常識の無さ(191大学)を嘆いている。学力低下対策として、第1に習熟度別クラス編成(167大学)が挙がっており、次に補習授業(146大学)、入試の見直し(114大学)と続いている。このように、大学生の学力低下が進む中、いままでにない学生の多様化が進んでいる。能力、適性、学習歴の異なる学生を同様に指導しても、学習効果の向上はあまり期待

* 鹿児島純心女子短期大学英語科 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

** 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻生活ビジネスコース (同上)

できない。そのために、現在、様々な大学や短大で、学習者の段階に応じた科目が開講されたり、習熟度別クラス編成が実施され、その報告もみられるようになった³⁾⁴⁾。立命館大学では、学生の英語力を適切に把握し、習熟度別クラス編成による授業や学習の効果を上げるため、ブレイスメントテストの工夫と開発を行ない、必要な各種テストの開発も進めている⁵⁾。習熟度別クラス編成がこのように実施されている昨今、英語教育をより充実したものとするためには、習熟度別クラス編成を総合的に分析、考察する必要があると思われる。

本研究の目的は、学生に対する習熟度別クラス編成の成果を、英語力の向上、学習に対する態度等から多角的に検討することである。鹿児島純心女子短期大学英語科(以下本学科と言う)では、平成12年度より、英会話と英作文の授業に習熟度別クラス編成を導入した。導入に関して検討を重ねた結果、初年度は、1年次前期のみ上級英語と基礎英語の2科目を新しく選択科目として導入し、1年次後期と2年次に英会話と英作文を、2段階編成(上級クラスを1クラス、普通クラスを3クラス)することに決定した。しかし、その後、学生の要望や教師の提案もあり、平成13年度前期は、2年生の英作文と英会話において上級1クラス、中級2クラス、基礎1クラスの3段階編成を実施することになった。

本研究の第1報として、本学科における習熟度別クラス編成導入に関する経緯、概要、及び習熟度別クラス編成(2段階)の成果について報告した(田原他, 2001)⁶⁾。その結果、個々の学生の能力に応じたクラス編成の有効性が確認され、また、クラス編成の細分化の必要性も示唆された。しかし、習熟度別クラス編成の在り方を決定するには、第1報の調査結果だけでは、データ不足である。

本論の目的は、習熟度別クラス編成(3段階)の意義と問題点を、学習に対する影響や意識の変化という面から調査、分析することである。そのために、まず、第1報のアンケートの質問内容と実施方法を見直し、個々の学生の変化及び学力との関連を把握するために、無記名ではなく記名式のアンケート調査を実施した。そのアンケートとTOEICの結果から、学生の能力に応じて3段階のクラス編成が適切に行われているかを検討する。次に、学生の意識調査結果をもとに、3段階クラス編成の影響という面だけでなく、授業に対する満足度や難易度及びクラス編成に対する要望等について具体的に調査する。最後に、本論で明らかにされる習熟度別クラス編成(3段階)の評価を踏まえ、本研究の今後の課題を考え将来への展望を開くことが、本論の目的となる。

2. 調査対象及び方法

調査対象は、本学科の学生で、2001年度前期の科目を履修した2年生79人である。

調査方法は、英語能力テストとアンケート方式である。英語テストは、TOEICを利用し、習熟度別クラス編成開始1週目の2001年4月7日に実施し、79人が受験した。アンケートは、前期授業終了時の7月に実施し、回収人数は74人で、回収率93.7%であった。

アンケートの目的は、2段階から3段階に再編成した学生の英語学習に対する意識や態度を調査し、習熟度別クラス編成の意義と問題点を解明することである。

アンケートの調査項目は46個で、主に、「授業の難易度」、「授業に対する満足度」、「習熟度別

クラス編成について」の3つの部分から構成されている。第1報と同様に「授業の難易度」及び「授業に対する満足度」では、英文作成法III（以下英作文と言う）及び英会話III（以下英会話と言う）の難易度や満足度について尋ねている。また、授業に対する満足や不満の理由として、レベル、学習項目、進度に関する質問項目も設けている。

「習熟度別クラス編成について」では、習熟度別クラス編成の効果と問題点を詳細に検討するために、2段階と比較した3段階編成の改善点、悪化点、英語力変化とその要因、クラス編成の是非に関する質問項目を設けている。また、1年生の後期に実施したアンケートと同様に3段階編成が授業の理解度、授業への参加、英語上達への効果、学習意欲などに与えた影響について質問している。

回答の形式については、学生の一般的傾向を知るために、5段階の多肢選択法が中心となっている。理由を述べさせる箇所及びいくつかの項目の回答にみられる「その他」などでは自由記述としている。

このようにして得られた回答に対して、未記入など分析不可能なものを除いて、SPSSによる統計解析を行った。アンケートの各項目についての単純集計及びその中のいくつかの項目間のクロス集計を行い、クラス（上級・中級・基礎）と主な項目との関係について独立性の検定（正確確率検定）を行った。また、上級、中級、基礎クラスを比較するためにいくつかの項目について Kruskal-Wallis 検定と Mann-Whitney 検定を行った。加えて、学生の英語能力を反映したクラス編成が行われているかどうかを調べるために、1元配置の分散分析と多重比較を用いてクラスによる差の検定を行った。多重比較については、等分散性が成立した場合 Scheffe の方法による多重比較を、不成立の場合 Tamhane による多重比較を行った。表1と2に、検定項目及び検定結果を示す。

表1 独立性の検定結果

	項目1	項目2	検定結果		項目1	項目2	検定結果
1	英作文クラス	難易度		22	英会話クラス	習熟度別編成の是非	***
2	英作文クラス	満足度		23	英会話クラス	習熟度別編成の必要性	
3	英作文クラス	レベル		24	英会話クラス	クラス編成方法希望	***
4	英作文クラス	学習項目	**	25	英作文クラス	授業の理解	
5	英作文クラス	進度		26	英作文クラス	授業への参加	
6	英会話クラス	難易度	***	27	英作文クラス	上達への効果	
7	英会話クラス	満足度	***	28	英作文クラス	学習意欲	
8	英会話クラス	レベル	***	29	英会話クラス	授業の理解	
9	英会話クラス	学習項目		30	英会話クラス	授業への参加	**
10	英会話クラス	進度	***	31	英会話クラス	上達への効果	*
11	英作文クラス	授業の変化		32	英会話クラス	学習意欲	**
12	英作文クラス	上達感	**	33	英作文教師	上達感	***
13	英作文クラス	伸びの程度		34	英作文教師	伸びの程度	
14	英作文クラス	伸びに対する満足度	*	35	英作文教師	伸びに対する満足度	**
15	英作文クラス	習熟度別編成の是非		36	英会話教師	上達感	***
16	英作文クラス	習熟度別編成の必要性		37	英会話教師	伸びの程度	***
17	英作文クラス	クラス編成方法希望		38	英会話教師	伸びに対する満足度	***
18	英会話クラス	授業の変化	***	39	英作文クラス	英作文力変化の要因	
19	英会話クラス	上達感	***	40	作文力の上達感	英作文力変化の要因	
20	英会話クラス	伸びの程度	***	41	英会話クラス	英会話力変化の要因	
21	英会話クラス	伸びに対する満足度	***	42	英会話の上達感	英会話力変化の要因	*

* p<0.1 ** p<0.05 *** p<0.01

表2 差の検定結果

	項目1	項目2	検定結果		項目1	項目2	検定結果
1	英作文クラス	難易度		13	英作文クラス	伸びに対する満足度	
2	英作文クラス	満足度	*	14	英会話クラス	上達感	***
3	英作文クラス	レベル		15	英会話クラス	伸びの程度	***
4	英作文クラス	学習項目	***	16	英会話クラス	伸びに対する満足度	***
5	英作文クラス	進度		17	英作文クラス	授業の理解	
6	英会話クラス	難易度	***	18	英作文クラス	授業への参加	
7	英会話クラス	満足度	***	19	英作文クラス	上達への効果	
8	英会話クラス	レベル	***	20	英作文クラス	学習意欲	
9	英会話クラス	学習項目	**	21	英会話クラス	授業の理解	
10	英会話クラス	進度	***	22	英会話クラス	授業への参加	**
11	英作文クラス	上達感	**	23	英会話クラス	上達への効果	***
12	英作文クラス	伸びの程度		24	英会話クラス	学習意欲	***

*p<0.1 **p<0.05 ***p<0.01

3. 結果と考察

3.1 クラス編成と英語力の関係

英作文と英会話のクラスは、1年次の成績に基づいた担当教員の推薦と学生の希望をもとに、英作文と英会話の担当教員が全員で討議し、それぞれ3段階に編成した。上級19人、中級40人、基礎15人である。つまり、2年次の学期始めに共通のプレイメントテストを実施することなく、クラス編成が行われたことになり、この編成が、学生の英語能力を正確に反映したものであるかという疑問が残る。クラス編成の適切さを確認するために、TOEIC結果を分析した。英会話力はリスニングテストの結果、英作文力はリーディングテスト結果により、ミスマッチの学生数を調べ、また、クラス別の平均値の比較を行った。

TOEIC結果で、上位から19番目の点数（リーディングは200点、リスニングは285点）を上級の

表3 現行クラス編成とTOEICテスト結果による仮想クラスの対応学生数

現行クラス	仮想クラス				
	上級に相当	中級に相当	基礎に相当	合計	ミスマッチ学生
英作文 上級	12	5	2	19	7 (36.8%)
中級	6	25	9	40	15 (37.5%)
基礎	1	8	6	15	9 (60.0%)
英会話 上級	9	8	2	19	10 (52.6%)
中級	10	23	7	40	17 (42.5%)
基礎	2	7	6	15	9 (60.0%)

の下限とし、59番目の点数（リーディングは135点、リスニングは230点）を中級の下限とした仮想的なクラス編成と現行のクラス編成との相違を、表3にまとめてある。

英作文では、ミスマッチの学生は、上級が7人（36.8%）、中級が15人（37.5%）、基礎が9人（60%）である。しかも、上級クラスの2人は、リーディング力で基礎クラスに相当し、基礎クラスの1人は上級クラスに相当している。リーディング力と作文力が完全に一致するとは言えないが、一般的に、リーディング力の高い学生は作文力も高いと言える。特に、基礎ではミスマッチの学生が6割おり、クラス編成の妥当性に疑問が残る。また、英会話におけるミスマッチ率は英作文より若干高く、上級が52.6%、中級が42.5%、基礎が60%である。上級の2人は基礎に相当し、基礎の2人は上級に相当する。特に、上級と基礎で不適合の学生が多いことから、アンケート結果においてミスマッチの影響があることも予測される。これらミスマッチの学生に対しては、個々にアンケートを見ていく必要がある。

表4 英作文クラス編成によるTOEICテスト結果と1元配置分散分析の結果

TOEICテスト	英作文上級 平均点(標準偏差)	英作文中級 平均点(標準偏差)	英作文基礎 平均点(標準偏差)	検定結果
リスニング	298.2(44.0)	246.1(47.7)	238.7(57.5)	***
リーディング	211.1(57.2)	157.1(34.6)	139.7(38.8)	***
総合点	509.2(86.4)	403.3(68.4)	378.3(85.1)	***

*** p < 0.01

表5 英会話クラス編成によるTOEICテスト結果と1元配置分散分析の結果

TOEICテスト	英会話上級 平均点(標準偏差)	英会話中級 平均点(標準偏差)	英会話基礎 平均点(標準偏差)	検定結果
リスニング	284.0(56.7)	255.9(47.1)	230.7(55.4)	**
リーディング	196.6(66.6)	163.9(34.5)	140.0(41.9)	***
総合点	480.5(113.2)	419.8(67.3)	370.7(81.4)	***

*** p < 0.01 ** p < 0.05

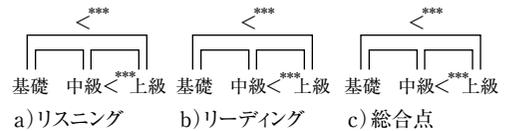


図1 英作文クラスとTOEIC結果

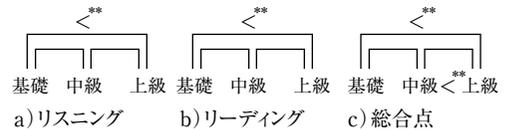


図2 英会話クラスとTOEIC結果

TOEIC結果をクラス別にまとめたものを表4と5に示してある。英作文・英会話ともに、基礎、中級、上級の順で平均値が高くなっている。英作文クラスのリーディングの平均値は、上級が211.1、中級が157.1、基礎が139.7である。英会話クラスにおけるリスニングの平均値は、上級が284.0、中級が255.9、基礎が230.7となっている。また、クラス間の差を調べるために行った1元配置の分散分析と多重比較の結果が、表4,5と図1,2にまとめてある。

この結果から、英作文では、総合点、リスニング、リーディングの全てにおいて、上級と中級及び上級と基礎の間に有意差 ($p < 0.01$) が認められた。しかし、中級と基礎の間には有意差は認められない。つまり、英語能力の面から見ると、上級クラスは、明らかに中級・基礎と差があり、クラス全体としては適切なクラス編成であるが、中級と基礎クラスの分け方は必ずしも適切とは言えない。

英会話では、総合点、リスニング、リーディングの全てにおいて、上級と基礎の間には有意差 ($p < 0.05$) があるが、中級と基礎の間には有意差は認められない。また、上級と中級の間で有意差 ($p < 0.05$) が認められるのは、総合点のみである。リスニングテストでは、上級と基礎のみに有意差が認められる結果となり、英作文以上に、クラス編成の適切さに疑問が残る。

TOEICの結果から判断すると、実施した3段階クラス編成は、学生の英語能力を適切に反映したものとは言い難い。しかし、TOEICはリスニング力とリーディング力を測るテストであるため、学生の実際の英会話力や英作文力とどれだけ対応しているか不明である。英語力とクラス編成の関係については、今後さらに検討する必要があると思われる。

3.2 授業の難易度

英作文、英会話について、難易度を尋ねた結果を図3にまとめてある。

英作文においては、全体・上級・中級・基礎の全てで「ちょうど良い」という答えが一番多く、7割以上が適切であると評価している。全てのクラスで「難しい」・「やや難しい」と答えた学生の比率は低い。一方、「易しい」・「やや易しい」と答えた学生は上級・中級では15%前後であるが、基礎は26.7%と高くなっている。

英会話においては、「ちょうど良い」が、上級、中級、基礎で73.7%、87.5%、40%で、上

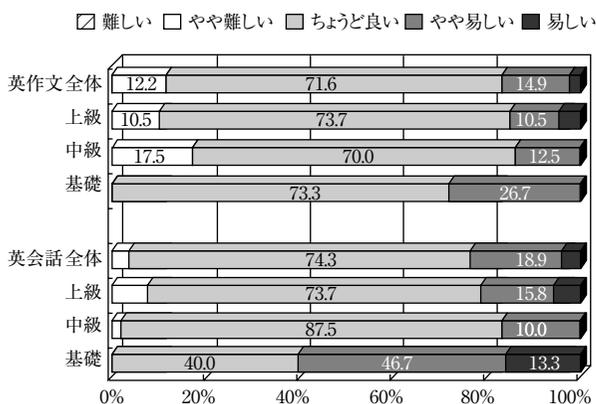


図3 習熟度別クラスと難易度

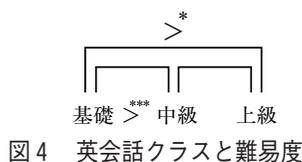


図4 英会話クラスと難易度

「ちょうど良い」と感じている学生が多く、反対に難易度が低いと感じている学生は基礎クラスに多い。

また、差の検定の結果 (表2-1, 6), 英会話のみクラス間に有意差 (p < 0.01) がみられた。多重比較の結果 (図4), 基礎と中級 (p < 0.01), 基礎と上級 (p < 0.1) に有意差が認められた。難易度においては、選択肢番号が大きいほど難易度が低いため、基礎クラスの平均ランク値が中級・上級と比べて大きくなっている。この結果から、英作文においては、難易度はクラス間に差がなく適切であると感じていることが分かる。しかし、英会話の基礎クラスにおいては、易しいと感じる学生が他のクラスと比較して著しく多く、これは前節で述べた通り、ミスマッチの学生の比率の高さに起因するものと思われる。

3.3 授業の満足度とその理由

学習内容に対する満足度について尋ねた結果を、図5に、満足度要因のレベル、学習項目、進度についてを表6, 7, 8にまとめている。

英作文における授業の満足度に関しては、全体では「満足」・「やや満足」と答えた満足群が63.5%, 「不満」・「やや不満」と答えた不満群が12.2%, 「どちらともいえない」が24.3%である。満足群をクラス別にみると、上級, 中級, 基礎でそれぞれ78.9%, 55.0%, 66.7%と半数以上が満足し、一方、不満群は、中級が最も多く20%, 上級・基礎ではほとんどいない。中級クラスは、他のクラスに比べて満足度の比率が低い結果となった。

英作文のレベルに関しては、全体・上

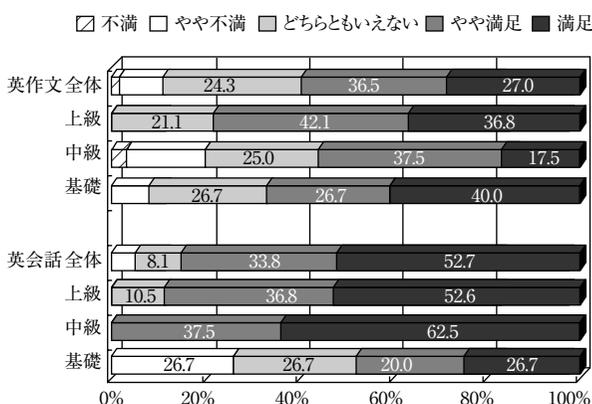


図5 習熟度別クラスと満足度

表6 授業に対する満足度の要因：レベル

		高い	やや高い	ちょうど良い	やや低い	低い	合計
英作文	全体	0(0.0%)	9(12.2%)	58(78.4%)	7(9.5%)	0(0.0%)	74(100%)
	上級	0(0.0%)	2(10.5%)	15(78.9%)	2(10.5%)	0(0.0%)	19(100%)
	中級	0(0.0%)	7(17.5%)	30(75.0%)	3(7.5%)	0(0.0%)	40(100%)
	基礎	0(0.0%)	0(0.0%)	13(86.7%)	2(13.3%)	0(0.0%)	15(100%)
英会話	全体	1(1.4%)	1(1.4%)	60(81.1%)	9(12.2%)	3(4.1%)	74(100%)
	上級	1(5.3%)	1(5.3%)	16(84.2%)	1(5.3%)	0(0.0%)	19(100%)
	中級	0(0.0%)	0(0.0%)	39(97.5%)	1(2.5%)	0(0.0%)	40(100%)
	基礎	0(0.0%)	0(0.0%)	5(33.3%)	7(46.7%)	3(20.0%)	15(100%)

表7 授業に対する満足度の要因：学習項目

		つまらない	ややつまらない	どちらともいえない	やや興味深い	興味深い	合計
英作文	全体	1(1.4%)	12(16.2%)	28(37.8%)	22(29.7%)	11(14.9%)	74(100%)
	上級	0(0.0%)	2(10.5%)	6(31.6%)	8(42.1%)	3(15.8%)	19(100%)
	中級	1(2.5%)	10(25.0%)	16(40.0%)	11(27.5%)	2(5.0%)	40(100%)
	基礎	0(0.0%)	0(0.0%)	6(40.0%)	3(20.0%)	6(40.0%)	15(100%)
英会話	全体	0(0.0%)	6(8.1%)	12(16.2%)	24(32.4%)	32(43.2%)	74(100%)
	上級	0(0.0%)	0(0.0%)	3(15.8%)	5(26.3%)	11(57.9%)	19(100%)
	中級	0(0.0%)	3(7.5%)	5(12.5%)	14(35.0%)	18(45.0%)	40(100%)
	基礎	0(0.0%)	3(20.0%)	4(26.7%)	5(33.3%)	3(20.0%)	15(100%)

表8 授業に対する満足度の要因：進度

		速い	やや速い	ちょうど良い	やや遅い	遅い	合計
英作文	全体	0(0.0%)	3(4.1%)	57(77.0%)	14(18.9%)	0(0.0%)	74(100%)
	上級	0(0.0%)	1(5.3%)	13(68.4%)	5(26.3%)	0(0.0%)	19(100%)
	中級	0(0.0%)	1(2.5%)	33(82.5%)	6(15.0%)	0(0.0%)	40(100%)
	基礎	0(0.0%)	1(6.7%)	11(73.3%)	3(20.0%)	0(0.0%)	15(100%)
英会話	全体	0(0.0%)	2(2.7%)	63(85.1%)	7(9.5%)	2(2.7%)	74(100%)
	上級	0(0.0%)	1(5.3%)	16(84.2%)	2(10.5%)	0(0.0%)	19(100%)
	中級	0(0.0%)	1(2.5%)	38(95.0%)	1(2.5%)	0(0.0%)	40(100%)
	基礎	0(0.0%)	0(0.0%)	9(60.0%)	4(26.7%)	2(13.3%)	15(100%)

級・中級・基礎は、概ね同じ傾向である。「ちょうど良い」と答えた学生が約8割で、レベルが高い、低いと答えた学生も少ないことから、全体的にはかなりの学生が適切であると感じているようである。

英作文の学習項目への興味に関しては、全体の44.6%が満足群、17.6%が不満群、「どちらともいえない」が37.8%である。上級、基礎クラスは、満足群の「興味深い」と「やや興味深い」を合わせた結果が、それぞれ57.9%、60.0%でかなり高い数値を示しているが、中級は32.5%とかなり低い。一方、「つまらない」と「ややつまらない」を合わせた不満群は、基礎にはなく、上級で10.5%、中級は27.5%である。学習項目に関する中級の評価は他のクラスに比べかなり低い。

英作文の進度に関しては、全体の77.0%が「ちょうど良い」と答え、「速い」・「遅い」という回答はない。「やや速い」は、全体の4.1%、「やや遅い」は、18.9%に過ぎず、進度に関しては、概ね適切であると思われる。

英作文における満足度とクラスに関して、独立性は、棄却されず(表1-2)、クラスと満足度は関係があるとは言えない。しかし、上級クラスの方が、中級、基礎に比べて満足度が高い傾向がみられた。また、満足及び不満足の原因として

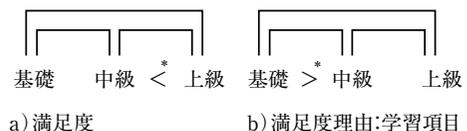


図6 英作文クラスと満足度及びその要因

のみ、有意水準 ($p < 0.05$) で独立性が棄却された。したがって、クラスと学習項目には関係が認められる。

英作文の満足度、レベル、学習項目、進捗に関してクラス間の差の検定を行った結果 (表 2-2, 3, 4, 5), 満足度において有意差 ($p < 0.1$) が、また学習項目において有意差 ($p < 0.01$) がみられた。多重比較の結果 (図 6), 満足度においては中級と上級 ($p < 0.1$) に、学習項目においては基礎と中級 ($p < 0.1$) に有意差があった。この結果より、満足度に関しては、中級より上級のほうが満足度が高く、学習項目に関しては、中級より基礎クラスの方が興味深いと感じていると言えよう。

英会話における授業の満足度に関しては、全体の86.5%が満足群、5.4%が不満群、「どちらともいえない」が8.1%である。満足群をクラス別にみると、上級、中級ではそれぞれ89.5%, 100%と満足度がかかなり高いが、基礎では46.7%と低くなっている。一方、不満群は、上級・中級にはないが、基礎クラスでは26.7%と4分の1以上を占める。

英会話におけるレベルが「ちょうど良い」と答えた学生は、全体の81.1%で、レベルが「高い」・「やや高い」は合わせて2.7%, 「低い」・「やや低い」は合わせて16.2%である。クラス別にみると、「ちょうど良い」という回答は上級で84.2%, 中級で97.5%と比率が高いが、基礎は33.3%とかなり低い。「低い」・「やや低い」と答えた学生は、上級、中級ではそれぞれ1人しかいないが、基礎では66.7%である。この結果から、上級・中級に比べ、基礎クラスではレベルが低いと感じている傾向がみえる。

英会話の学習項目への興味に関しては、全体の75.7%が満足群、8.1%が不満群である。上級、中級クラスは、「興味深い」・「やや興味深い」を合わせた結果が、それぞれ84.2%, 80%でかなり高い数値を示しているが、基礎は53.3%と低い。一方、つまらないと答えた学生は、上級ではなく、中級は7.5%であるが、基礎は20%と高くなっている。

英会話の進捗に関しては、全体の85.1%が「ちょうど良い」と答えている。クラス別にみると、「ちょうど良い」と答えた学生は、上級、中級、基礎で、それぞれ84.2%, 95%, 60%であり、基礎クラスの比率が低い。一方、基礎クラスで「やや遅い」・「遅い」が40%あり、半数近くの学生が不適切と感じている。

英会話における満足度とクラスに関する独立性の検定の結果 (表 1-7) は、有意水準 ($p < 0.01$) で独立性が棄却された。また、レベル、学習項目、進捗の3項目とクラスに関する独立性の検定を行った結果 (表 1-8, 9, 10), レベルと進捗で、有意水準 ($p < 0.01$) で独立性が棄却された。したがって、クラスとレベル及び進捗には関係が認められる。特に、基礎クラスにおいて、レベルが低く進捗が遅いと感じている学生が多い。

英会話の満足度、レベル、学習項目、進捗に関して上級、中級、基礎クラスの差の検定を行った結果 (表 2-7, 8, 9, 10), 満足度、レベル、進捗において有意差 ($p < 0.01$) が、また

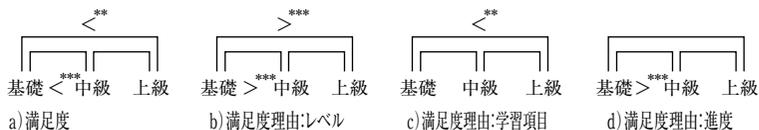


図7 英会話クラスと満足度及びその要因

学習項目において有意差 ($p < 0.05$) がみられた。多重比較の結果 (図7), 満足度においては基礎と中級 ($p < 0.01$) 及び基礎と上級 ($p < 0.05$) に, レベルでは基礎と中級 ($p < 0.01$) 及び基礎と上級 ($p < 0.01$) に, 学習項目でも基礎と上級 ($p < 0.05$) に, 進度においては基礎と中級 ($p < 0.01$) に有意差があった。

この結果より, 英会話において, 基礎と上級では進度のみ, 基礎と中級では学習項目のみ差がみられず, 中級と上級では全ての項目で差がみられなかった。また, レベルと進度においては, 選択肢番号が大きいほど難易度が低く進度が遅いため, 基礎クラスの平均ランク値が中級・上級と比べて大きくなっている。したがって, 満足度, レベル, 進度に関しては, 基礎クラスで評価が最も低いことが分かる。

3.4 習熟度別クラス編成について

3.4.1 授業への影響

習熟度別クラス編成を3段階にしたことでどのような影響があったのか, 授業の理解度, 授業への参加度, 英語上達への効果, 学習意欲の4項目について分析した。

A. 授業の理解 授業の理解についての結果を図8に示す。英作文に関しては, 全体・上級・中級・基礎クラスの全てで「変わらない」が最も多い。全体では, 45.9%が「変わらない」と回答し, 50.0%が理解度が増したと答えている。「ややわかりにくくなった」という回答は3人(4.1%)のみである。クラス別に見ると, 「わかりやすくなった」という比率は, 基礎クラスが一番高く33.3%, 次が上級クラスの31.6%, 中級クラスはその半分の15.0%であるが, 「やや分かりやすくなった」を合わせると, 上級が52.7%, 中級50%, 基礎46.6%とほとんど変わらない。

英会話では, 全体的には63.5%が理解度が増したと答え, 「変わらない」が33.8%, 理解度が低くなったという回答は2.7%である。しかし, クラス別に見るとその比率が異なる。上級クラスでは「分かりやすくなった」の42.1%, 中級クラスでは「やや分かりやすくなった」の37.5%, 基礎クラスでは, 「変わらない」の33.3%がそれぞれで最も高い比率を示している。理解度が増した比率は, 上級63.2%, 中級67.5%, 基礎53.3%である。これらから, 基礎クラスは上級や中級に

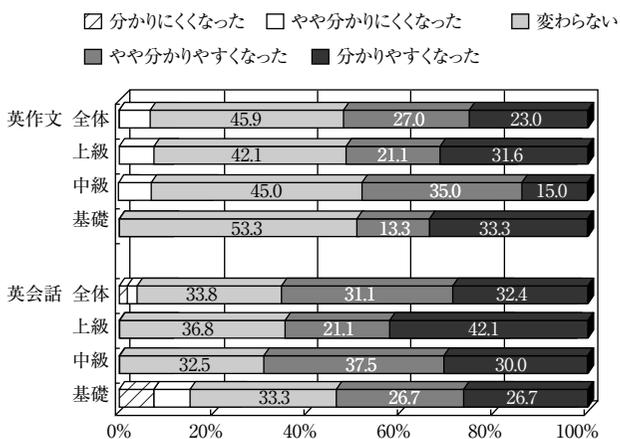


図8 授業への影響 A. 授業の理解

比べて, 理解度に対するクラス編成の影響がやや少ないと言える。

授業の理解と3段階クラス編成との関係について独立性と差の検定を行った結果, 両科目においてどちらも棄却されなかった(表1-25, 29, 表2-17, 21)。つまり, クラス編成と授業の理解度には関係があるとは言えず, クラス間で有意差もないことが分かった。これらの結果から, 3段階編成は, クラスに関係なく大体一様な理解度へのプラス効果をもたらしたと言える。

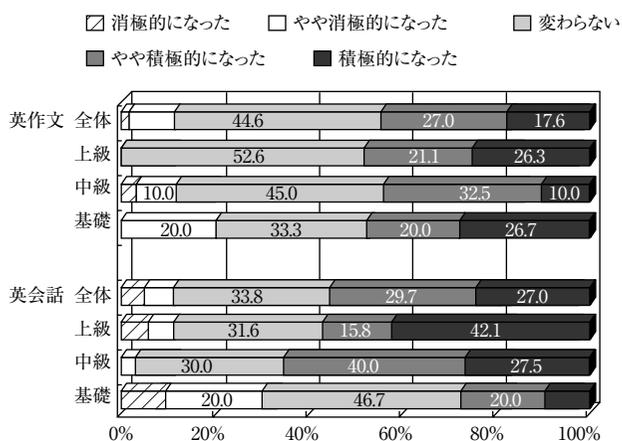


図9 授業への影響 B. 授業への参加

「変わらない」が33.8%で一番比率が高いが、クラスにより傾向が異なる。一番多い回答は、上級クラスでは「積極的になった」(42.1%)、中級では「やや積極的になった」(40%)、基礎では「変わらない」(46.7%)である。また、基礎では、積極性が増したとする学生が26.7%、減じたとする学生が26.7%と2極分化の傾向を示している。

授業への参加と3段階クラス編成との関係について独立性の検定を行った結果(表1-26, 30), 英作文では独立性が棄却されなかったが、英会話では独立性が有意水準 ($p < 0.05$) で棄却された。つまり、英会話において、クラスと授業への参加は関係があることが分かった。

また、差の検定の結果(表2-18, 22), 英会話では有意差 ($p < 0.05$) がみられた。多重比較の結果(図10-a), 上級と中級, 上級と基礎クラスでは、有意差はみられなかったが、中級と基礎では有意差 ($p < 0.01$) があり、中級クラスの方が基礎クラスより授業の参加に関して積極性が増したと感じている学生が多いと言える。3段階クラス編成を実施する際、期待した効果

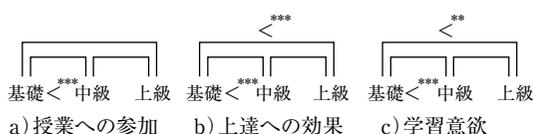


図10 英会話クラスと授業への影響

の一つは、上級クラスに能力の高い学生が抜けることにより、その他の学生がより積極的に授業に参加する機会が増えるのではないかとのことであった。しかし、今回の結果では、英会話の基礎クラスにおいては、授業への参加に関して期待された効果がみられなかった。

C. 英語上達への効果 英語上達への効果についての結果を図11に示す。英作文では全体・上級・中級・基礎クラスの全てで「やや増した」が最も多く、効果が上がったという回答が、上級68.4%、中級60%、基礎53.3%である。全体的に、3段階クラス編成の移行を、英語力上達に効果的であったと捉えている学生が多いことは注目し値する。特に、上級クラスにおいてそれは顕著に現れていると言えよう。

英会話全体では、「やや増した」と回答する学生が最も多い(43.2%)が、クラスによってその評価が異なる。上級では、「増した」(47.4%), 「やや増した」(26.3%), 中級では、「増した」(12.5%), 「やや増した」(60%)となっており、約7割強の学生が英語上達に効果的であったと評価して

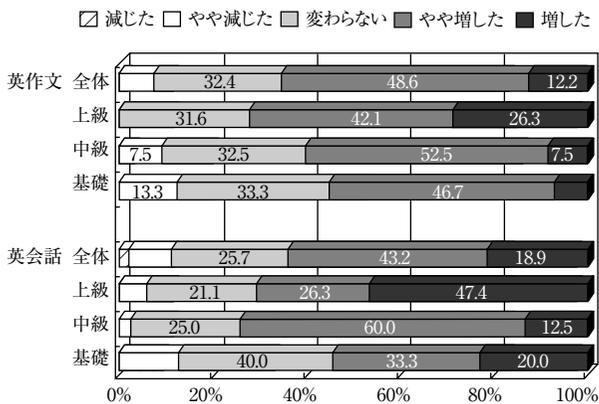


図11 授業への影響 C. 英語力上達への効果

($p < 0.01$) がみられ、多重比較の結果(図10-b)、上級と中級クラスでは、有意差はみられなかったが、上級と基礎及び中級と基礎では有意差($p < 0.01$)が認められた。つまり、基礎クラスより上級や中級クラスにおいて、3段階クラス編成の英語上達に対する効果を評価している学生が多いと言える。

D. 学習意欲 学習意欲についての結果を図12に示す。英作文全体では「変わらない」が最も多く、38.4%である。上級と中級クラスでは、学習意欲が「増した」または「やや増した」という回答が6割近くいるが、基礎では3割程度で、上級や中級クラスの方が、学習意欲が向上したという比率が高い。

英会話全体では、「やや増した」と「変わらない」がともに35.1%で最も高いが、クラスによって評価が異なる。上級と中級では「増した」と「やや増した」を合わせると7割程度いるが、基礎では26.7%にすぎず、学習意欲の低下を招いたとする回答も上級・中級ではほとんどいないが、基礎では20%と評価が低い。

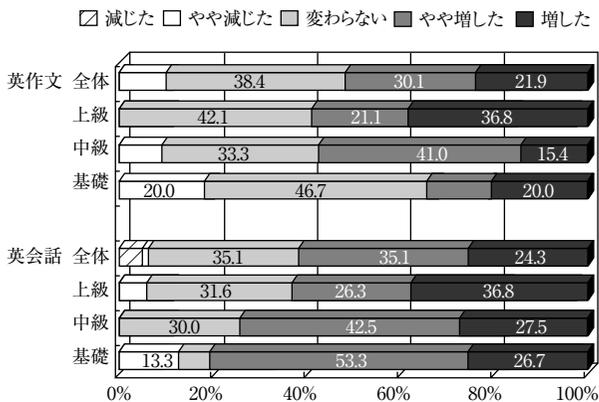


図12 授業への影響 D. 学習意欲

棄却され、クラスと学習意欲の間には関係があることが分かった。また、差の検定の結果(表2-20, 24)、英会話では有意差($p < 0.01$)がみられ、多重比較の結果(図10-c)、上級と中級クラスでは有意差はなかったが、上級と基礎($p < 0.05$)及び中級と基礎($p < 0.01$)では有意差が認められた。つまり、上級や中級クラスの方に、3段階クラス編成にしたことで、学習意欲が向上したという学生が基礎クラスより多いと言える。両科目の基礎クラスにおいて、学習意

いる。一方、基礎では、効果が下がったとする回答が46.7%で、「やや増した」(20.0%)より多い。

英語上達への効果と3段階クラス編成との関係について独立性の検定を行った結果(表1-27, 31)、英作文では独立性が棄却されなかったが、英会話では独立性が有意水準($p < 0.1$)で棄却され、クラスと英語上達への効果の間には関係があることが分かった。また、差の検定の結果(表2-19, 23)、英会話では有意差

欲があまり向上していないことは検討を要する。習熟度別クラス編成の導入に当たり、習熟度の低い方のクラスに分けられた学生の学習意欲が低下するのではという懸念があったが、残念ながらそれを裏付ける結果となった。

これらの結果から、英会話においては、上級や中級クラスの学生の方が、基礎クラスより3段階クラス編成の影響を肯定的に捉えていることが分かる。一方、英作文においては、クラス間に有意差はなく、ほぼ同様の評価をしていると言える。全体的に見ると、両科目において、3段階クラス編成は、授業の理解・授業への参加・英語上達への効果・学習意欲のいずれにおいても、よい影響を与えたと言える。しかし、英会話においては基礎クラスの評価が相対的に低くクラス間の差が窺える。これは、3段階編成以外の影響も考えられ、今後の検討を要する。

E. 改善点と悪化点 「3レベルクラス編成にしたことにより、授業に関して何らかの変化がありましたか。」という質問に対して、英作文では、全体の40.5%、上級の36.8%、中級の42.5%、基礎の40.0%が「はい」と答えている。英会話では、全体の56.2%、上級の78.9%、中級の40.0%、基礎の71.4%が授業への影響を認めている。授業の変化と3段階クラス編成との関係について独立性の検定を行った結果(表1-11, 18)、英作文では独立性が棄却されなかったが、英会話では独立性が有意水準 ($p < 0.01$) で棄却された。つまり、英会話では、クラスと授業の変化の間には関係があることが分かった。

英作文と英会話における改善点と悪化点について尋ねた結果を、表9と10に示してある。回答が複数選択だったため、各選択肢についての合計人数のみを表記してある。

表9 習熟度別クラス編成による改善点

回答項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
英作文 全体	16	9	13	10	10	12	9	11	6	2	0	96
上級	1	1	5	5	1	6	7	4	1	0	0	31
中級	14	6	5	4	6	2	2	6	4	2	0	49
基礎	1	2	3	1	3	4	0	1	1	0	0	16
英会話 全体	21	8	19	20	11	25	15	15	16	10	1	160
上級	2	2	5	10	3	11	12	9	11	3	0	68
中級	15	5	9	8	4	9	3	6	5	6	0	70
基礎	4	1	5	2	4	5	0	0	0	1	1	22

注 英作文における選択肢10番と英会話における選択肢11番は「改善点なし」という回答のため、合計には加えていない。

表10 習熟度別クラス編成による悪化点

回答項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
英作文 全体	1	0	2	1	1	0	1	0	1	0	24	7
上級	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0
中級	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0	13	4
基礎	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	3
英会話 全体	1	1	2	2	0	2	3	2	5	26	19	44
上級	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	11	2
中級	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	13	1
基礎	1	1	1	1	2	0	2	2	2	4	2	16

注 選択肢11番は「悪化点なし」という回答のため、合計には加えていない。

英作文・英会話とも全体では、改善点として、1番の「授業の理解度が上がった」、3番の「積極的に英語で発言しやすくなった」、4番の「学習内容が興味深くなった」、6番の「クラスの雰囲気活気がでてきた」を挙げた学生が多い。しかし、クラスによって選択項目の傾向が少し異なる。英作文・英会話とも、上級では、7番「周囲の学生から良い刺激を受けるようになった」が最も多く、次が6番である。一方、中級では1番が最も多く、基礎では6番が最も多い。3段階クラス編成の効果として、上級の学生は同じレベルの学生から良い刺激を受け、他のレベルにおいては進度が適切になり理解度が上がるということを期待していたのであるが、これをほぼ裏付ける結果が出たと言える。

悪化点を挙げている学生は少なく、英作文では、6つの項目において1~2名しかいない。英会話では、10番の「英語での会話に自信がもてなくなった」という学生が5名おり、上級や中級ではほとんどいないが、基礎クラスで悪化点を指摘している学生が6番以外の項目に1~2

名ずついる。全体的には、悪化点は少ないものの、基礎クラスにそれを指摘する学生が多いことの問題点を説明する必要があると言える。

3.4.2 英語力の変化

2段階の習熟度別クラス編成から3段階に移行したことにより、英語力の伸びにどのような影響があったと学生は感じているのか、それぞれ英作文と英会話についての結果を表11～13にまとめてある。

英作文においては、全体の半数の学生が英作文力の上達を「感じる」・「やや感じる」と答えている。クラス別にみると、上級、中級、基礎でそれぞれ63.1%、

55%、20%となっている。特徴的なのは、上級・中級クラスと比較すると、基礎において上達感のある学生の比率がかなり下がっていることである。一方、上級・中級クラスでは「どちらともいえない」が25%前後であるのに対し、基礎クラスでは66.7%と比率が高くなっている。

英作文力の上達感、伸びの程度、伸びに対する満足度の3項目とクラスとの関係について独立性の検定を行った結果(表1-12, 13, 14)、伸びの程度では独立性が棄却されなかったが、上

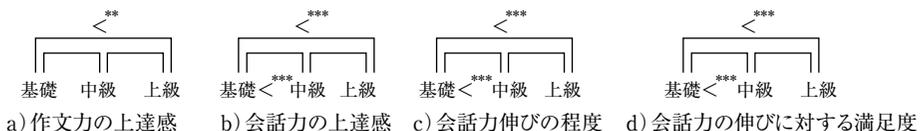


図13 英語力の変化

表11 英作文力／英会話力の上達を感じるか

		感じない	あまり感じない	どちらともいえない	やや感じる	感じる	合計
英作文	全体	4(5.4%)	8(10.8%)	25(33.8%)	29(39.2%)	8(10.8%)	74(100%)
	上級	1(5.3%)	1(5.3%)	5(26.3%)	7(36.8%)	5(26.3%)	19(100%)
	中級	1(2.5%)	7(17.5%)	10(25.0%)	19(47.5%)	3(7.5%)	40(100%)
	基礎	2(13.3%)	0(0.0%)	10(66.7%)	3(20.0%)	0(0.0%)	15(100%)
英会話	全体	3(4.1%)	12(16.2%)	23(31.1%)	27(36.5%)	9(12.2%)	74(100%)
	上級	1(5.3%)	0(0.0%)	5(26.3%)	6(31.6%)	7(36.8%)	19(100%)
	中級	0(0.0%)	4(10.0%)	15(37.5%)	19(47.5%)	2(5.0%)	40(100%)
	基礎	2(13.3%)	8(53.3%)	3(20.0%)	2(13.3%)	0(0.0%)	15(100%)

表12 英作文力／英会話の伸びの程度

		低下した	少し低下した	ほとんど変わらない	やや伸びた	かなり伸びた	合計
英作文	全体	0(0.0%)	0(0.0%)	20(27.0%)	52(70.3%)	2(2.7%)	74(100%)
	上級	0(0.0%)	0(0.0%)	6(31.6%)	13(68.4%)	0(0.0%)	19(100%)
	中級	0(0.0%)	0(0.0%)	8(20.0%)	30(75.0%)	2(5.0%)	40(100%)
	基礎	0(0.0%)	0(0.0%)	6(40.0%)	9(60.0%)	0(0.0%)	15(100%)
英会話	全体	0(0.0%)	4(5.4%)	25(33.8%)	36(48.6%)	9(12.2%)	74(100%)
	上級	0(0.0%)	1(5.3%)	3(15.8%)	10(52.6%)	5(26.3%)	19(100%)
	中級	0(0.0%)	0(0.0%)	12(30.0%)	24(60.0%)	4(10.0%)	40(100%)
	基礎	0(0.0%)	3(20.0%)	10(66.7%)	2(13.3%)	0(0.0%)	15(100%)

表13 英作文力／英会話力の上達に対する満足度

		不満	やや不満	どちらともいえない	やや満足	満足	合計
英作文	全体	6(8.1%)	12(16.2%)	22(29.7%)	26(35.1%)	8(10.8%)	74(100%)
	上級	1(5.3%)	4(21.1%)	5(26.3%)	4(21.1%)	5(26.3%)	19(100%)
	中級	3(7.5%)	6(15.0%)	9(22.5%)	19(47.5%)	3(7.5%)	40(100%)
	基礎	2(13.3%)	2(13.3%)	8(53.3%)	3(20.0%)	0(0.0%)	15(100%)
英会話	全体	2(2.7%)	13(17.6%)	17(23.0%)	26(35.1%)	16(21.6%)	74(100%)
	上級	0(0.0%)	2(10.5%)	3(15.8%)	5(26.3%)	9(47.4%)	19(100%)
	中級	1(2.5%)	4(10.0%)	9(22.5%)	19(47.5%)	7(17.5%)	40(100%)
	基礎	1(6.7%)	7(46.7%)	5(33.3%)	2(13.3%)	0(0.0%)	15(100%)

達感では有意水準 ($p < 0.05$) で、伸びに対する満足度では有意水準 ($p < 0.1$) で、独立性が棄却された。つまり、英作文では、クラスと英作文力の上達感及び伸びの程度に対する満足度には関係があることが分かる。また、差の検定の結果 (表 2-11, 12, 13), 英作文力の上達感において、3クラス間に有意差 ($p < 0.05$) が認められた。多重比較 (図13-a) では、上級と基礎に有意差 ($p < 0.05$) がみられる。

これらの結果から、英作文力の伸びに関しては、上級・中級クラスと比較して、基礎クラスの評価が低いと言えよう。基礎において英作文力の上達を「感じない」とした学生2人は、どちらも授業の理解においても「わかりやすくなった」としており、また、そのうちの1人は授業のレベルが「やや低い」と答えている。基礎クラスでは、難易度に関しても「易しい」こそなかったものの、「やや易しい」が26.5%と上級・中級クラスより比率が高くなっていて、TOEIC結果を基準としたクラス分けを想定した場合、基礎においてミスマッチと思える学生が半数をこえることも考え併せると、基礎クラスにおいては、授業内容やレベルが自分の力より低いと感じている学生が多いことが窺え、これが上達感欠落の一因ではないかと推測できる。

英会話においては、48.7%の学生が英会話力の上達を「感じる」・「やや感じる」と答えている。クラス別にみると、上級、中級クラスでは、それぞれ68.4%, 52.5%と半数以上が英会話力の上達を「感じる」・「やや感じる」としているのに対し、基礎では13.3%にすぎない。反対に、英会話力の上達を「感じない」・「あまり感じない」と答えた学生は、上級及び中級クラスでは5.3%, 10%と低いが、基礎では66.6%と高い比率を示し、対照的な結果となっている。

英会話力の伸びの程度に関しては、全体の60.8%が「伸びた」・「やや伸びた」と回答し、「ほとんど変わらない」が33.8%, 「少し低下した」が5.4%である。クラス別では、上級・中級クラスのどちらも70%以上が「伸びた」・「やや伸びた」と答えているのに対し、基礎では13.3%に留まる。また「少し低下した」は、基礎クラスでは20%あるが、他クラスでは上級に5.3%あるにすぎない。

英会話力の伸びに対する満足度は、全体では不満群が20.3%, 満足群が56.7%となっている。上級・中級では満足群が60%以上、不満群が約10%と満足群が圧倒的に多いが、基礎では不満群が53.3%, 満足群が13.3%と上級・中級の反対の結果となっている。

英会話力の上達感、伸びの程度、伸びに対する満足度の3項目とクラスとの関係について独立性の検定を行った結果 (表 1-19, 20, 21), 全項目において有意水準 ($p < 0.01$) で、独立性が棄却された。つまり、英会話では、クラスと英会話力の上達感、伸びの程度やそれに対する満足度には関係があることが分かる。また、差の検定の結果 (表 2-14, 15, 16), 上記3項目全てにおいて、クラス間に有意差 ($p < 0.01$) がみられた。多重比較の結果 (図13-b, c, d) では、全項目において、上級・基礎及び中級・基礎間で有意差 ($p < 0.01$) がみられた。

これらの結果から、英会話力の伸びに関しても、上級・中級クラスと比較して基礎クラスの評価が低く、英作文より顕著にその違いが現れていると言える。3段階編成の授業への影響に関する基礎クラスの評価は、相対的に低く (前節参照), この結果を裏付ける。難易度、レベル、進度において、基礎クラスと他クラスには有意差がみられた。基礎に学習内容のレベルが低く、授業進度が遅いと感じている学生が多い。また、授業への参加や学習意欲などに関して、基礎クラスにおいて期待された効果がみられなかったことは、既に述べたとおりである。これらが、英会話力の上達に対する低い評価につながったと考えられる。英語力変化の要因につい

て学生がどのように捉えているのか次に考察するが、この結果は、基礎クラスへの対応の仕方やクラス分けの方法について、再検討を促すものであろう。

3.4.3 英語力の上達とその要因

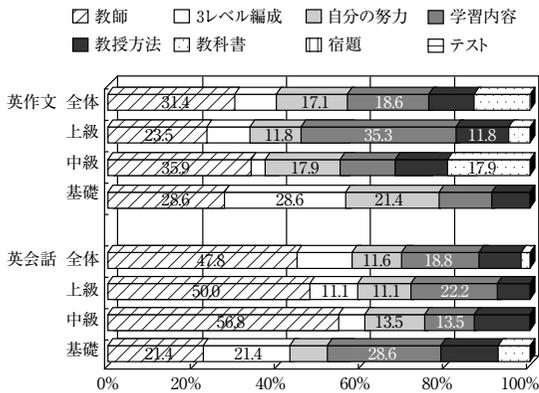


図14 習熟度別クラスと要因

図14に、英作文力及び英会話力の変化の要因のクラス別集計結果を、英語力の変化を感じるか感じないかで満足群と不満群にグループ分けし、そのグループ毎に要因を集計した結果を図15に示す。「英語力の変化を感じるか」という問いに「どちらともいえない」と答えた学生は、満足群に入れた。なお、要因として大きいと感じる順に3つ選ばせたが、本稿では紙面の関係上、最も大きい要因についてのみ考察する。

英作文力の変化の要因に関しては、全体では「教師」の比率が31.4%で最も高く、「学習内容」、「自分の努力」とそれに続く。クラス別にみると、上級では「学習内容」が35.3%と最も高く、2位の「教師」が23.5%である。中級では「教師」が35.9%と他要因より抜き出ており、「宿題」が17.9%で「自分の努力」とともに2位となっている。「宿題」の17.9%は、他クラスと比較するとかなり高いと言える。また、「3レベル編成」が2.6%と上級・基礎に比べて比率が低いのも中級の特徴と言えよう。基礎では「教師」、「3レベル編成」が28.6%と同率で最も高く、「自分の努力」がそれに次ぐ。基礎で特筆すべきは、英作文力の変化の最も大きな要因として、「3レベル編成」の比率が高いことであろう。

英会話力の変化の要因では、全体・上級・中級ともに「教師」の比率が50%前後で最も高く、「学習内容」、「自分の努力」がそれに続く。基礎では「学習内容」が28.6%で最も高く、次いで「教師」、「3レベル編成」が21.4%と同率で並んでいる。英作文同様に、他クラスと比較すると、基礎における「3レベル編成」の比率が高い。

英作文及び英会話クラスと要因との独立性の検定を行った結果(表1-39, 41)、どちらにおいても独立性は棄却されなかった。つまり、クラスと要因との間に関係が認められるとは言えない。この結果から、クラスにより若干の相違はあるものの、英作文力及び英会話力変化の要因として何を重要だと感じるかに、習熟度別クラスがかかわるとは言えない。

総合的に見ると、どちらの科目においても、「教師」、「学習内容」、「自分の努力」が英語力変化の大きな要因として浮かび上がる。しかし、基礎においては他クラスより3段階編成要因の比率が高いことから、クラスにより3段階編成の影響をどの程度感じるかが異なる傾向にあると思われる。また、「教科書」・「テスト」を第1要因として選ぶ学生はどのクラスにおいてもほとんどなく、学生は実際の授業での活動などを英語力上達の要因として重視していると推測できる。なお、英作文力及び英会話力の上達の第1要因として、「教師」の比率が最も高かったことより、英作文及び英会話を担当する教師と上達感、伸びの程度及びそれに対する満足度との

独立性の検定を行った(表1-33, 34, 35, 36, 37, 38)。英作文では上達感 ($p < 0.01$) と伸びに対する満足度 ($p < 0.05$) で、英会話では全項目において有意水準 ($p < 0.01$) で独立性が棄却され、教師とこれらの項目間には関係が認められた。

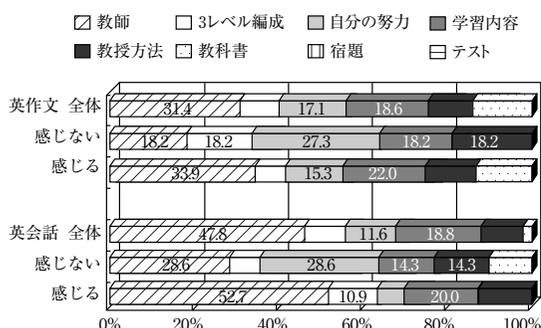


図15 上達感と要因

英作文力の変化の要因を、クラスではなく、英作文力の上達を「感じる」か「感じない」かに分けてみると、上達を感じる満足群では、「教師」が33.9%で最も高く、「学習内容」がそれに次ぐ。不満群では「自分の努力」が高く、残りは「3レベル編成」など4項目に等しく散っている。「感じない」と答えた学生の72.7%は中級の学生

で、中級の学生数が多いことを差し引いても、中級の割合がいくぶん高くなっている。

英会話力の変化に関して、満足群では「教師」が52.7%と半数をこえ、「学習内容」が20%と次いで高い。不満群では、「教師」と「自分の努力」がともに28.6%で最も高く、「学習内容」と「教授方法」が同率でそれに続く。「感じない」と答えた学生の64.3%は基礎クラスの学生で、全体に占める基礎クラスの学生数が20%にすぎないことを考慮すると、かなり高い比率だと言えよう。

英作文力及び英会話力の上達感と要因との独立性の検定を行った結果(表1-40, 42)、英作文では独立性が棄却されなかったが、英会話においては有意水準 ($p < 0.1$) で棄却された。英作文では上達感と要因の間には関係が認められるとは言えないが、英会話では上達感と要因には関係が認められる。

英作文、英会話のどちらにおいても、不満群では「自分の努力」を英語力変化の第1要因として挙げている学生が最も多く、学生自身の努力不足が上達感のない原因だと感じている学生が多いことを窺わせる。「教師」の要因は、両科目のどちらの群においても高い比率を示したが、満足群の方がその比率が高い傾向にある。また、英作文において、満足群では「学習内容」が22%と2番目に高い要因となっているのに対し、不満群では「学習内容」を第1要因として選択した学生が皆無である。これより、英作文における「学習内容」は、上達に非効果的だと感じる学生は少なく、効果的だと感じる学生が多い傾向にあると思われる。なお、英作文の不満群には中級クラスの学生が多いが、英会話では基礎クラスの学生が多いという結果となっており、科目により異なる傾向がみられる。

3.4.4 習熟度別クラス編成の是非

3段階の習熟度別クラス編成の是非の結果を表14にまとめてある。また、習熟度別クラス編成の必要性及びクラス編成方法希望の結果は、まとめて図16に示されている。

英作文全体でみると、3段階習熟度別クラス編成に肯定的な意見が77.0%と高い比率を示す。クラス別にみても、同様の傾向にあり、上級と基礎クラスでは肯定的な意見が8割以上を占める。習熟度別クラス編成の必要性に関しても、全体において、またクラス別でも、何らかの形で必要であるという回答が80%前後となっている。クラス編成方法に関しては、3段階編成希

望が全体で6割以上、中級・基礎クラスが7割近くあるのに対し、上級では44.4%に留まっている。一方、2段階編成希望は上級において22.2%と、他クラスより比率が高くなっている。上級クラスの学生のほとんどは2段階編成時にも上級に属していたため、3段階編成への移行後も特に大きな変化を感じなかった可能性がある。しかし、上級クラスで2段階編成を希望した学生全員、授業への満足度も高く、3段階編成により学習効果が増したと回答しているため、この結果が何に起因するのかについては、更なる調査が必要であろう。

習熟度別クラス編成が不要であると回答した学生13人中9人が、自由記述欄でその理由を述べている。そのうち6人は習熟度別編成の効果が感じられない、つまりクラス編成方法を変えても授業に何ら変化がないため、必要性を感じないと回答している。また、学習に効果的な授業には、クラス編成方法以外の要因がかかわると指摘する声もあった。

表14 3段階習熟度別クラス編成は良かったか

	はい	いいえ	合計
英作文 全体	57 (77.0%)	17 (23.0%)	74 (100%)
上級	16 (84.2%)	3 (15.8%)	19 (100%)
中級	29 (72.5%)	11 (27.5%)	40 (100%)
基礎	12 (80.0%)	3 (20.0%)	15 (100%)
英会話 全体	56 (75.7%)	17 (23.0%)	74 (100%)
上級	19 (100.0%)	0 (0.0%)	19 (100%)
中級	31 (77.5%)	9 (22.5%)	40 (100%)
基礎	7 (46.7%)	8 (53.3%)	15 (100%)

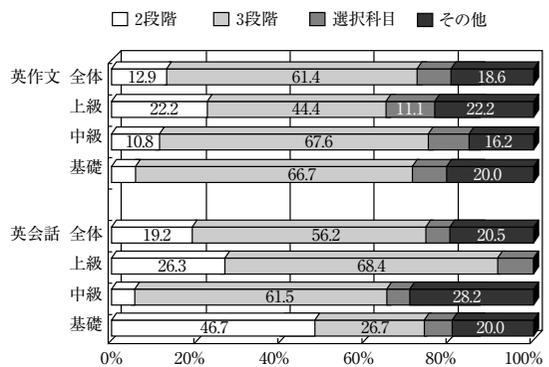


図16 習熟度別クラスとクラス編成方法希望

英作文における3段階クラス編成の是非、必要性、及び編成方法希望の3項目とクラスとの関係について独立性の検定を行った結果(表1-15, 16, 17)、3項目全てにおいて独立性が棄却されなかった。したがって、これらの項目とクラスには関係があるとは言えず、どのクラスにおいても、似たような傾向がみられると言えよう。

英会話全体でも、3段階の習熟度別クラス編成に肯定的な意見が77.0%と高い比率を示す。しかし、クラス別にみた場合、上級では100%が「3段階編成は良かったか」との問いに「はい」を選択しているのに対し、基礎では46.7%にすぎず、半数以上が「いいえ」と答えている。習熟度別クラス編成の必要性に関しては、どのクラスでも何らかの形で必要だと感じている学生が多い。全体において79.5%、またクラス別でみると、最も低い中級で71.7%、上級は94.7%、3段階編成に関しては否定的な意見が半数をこえた基礎でも、80%が必要性を認めている。習熟度別クラス編成希望では、全体の56.2%が3段階編成を希望している。クラス別では、3段階編成希望は、上級で68.4%、中級で61.5%という結果となっているが、基礎では26.7%と比率が低い。その一方、2段階編成希望は基礎で多く、約5割を占める。

英会話における3段階の習熟度別クラス編成の是非、必要性及び編成方法希望の3項目とクラスとの関係について独立性の検定を行った結果(表1-22, 23, 24)、習熟度別クラス編成の必要性を除く2項目において独立性が棄却された(p < 0.01)。したがって、クラスと3段階習熟度別クラス編成の是非及び編成方法希望とは関係があると言えるが、クラスと必要性は関係が

あるとは言えない。

英作文同様に、特に授業に変化がないという理由で習熟度別クラス編成は不要とした回答もあるが、概ねどのクラスにおいても必要だと感じている学生が多数を占める。しかし、その編成方法に関してクラスにより意見が分かれていることがこの結果から分かる。基礎クラスで2段階編成を選択した学生の自由記述に、3段階だと授業の進度が遅く、初級過ぎるという指摘があった。また、特に理由は記されていないが、2段階のほうが、発言しやすいという声もある。授業への参加度に関して、基礎では「積極性が減じた」という回答が25%強あったことも、これを裏付けるものであろう。これまでにみたように、他クラスと比較すると、基礎クラスでは3段階編成による授業への影響に関して、効果減とする意見が多かった。3段階編成に否定的な回答が多いという結果はそれに起因すると考えられる。

習熟度別クラス編成の問題点として、基礎クラスへの対応がよく取り上げられるが、これらの結果は、その問題点を改めて突き付けるものとなった。しかし、これが習熟度別クラス編成の問題なのか、或いは他の要因によるものなのかについては、この結果だけでは言えず、更に調査を進める必要がある。

4. まとめ

3段階習熟度別クラス編成における、授業の難易度、満足度、授業への影響、英語力の変化及び習熟度別クラス編成の是非などに関する学生の意識を、習熟度別クラス毎に分析した結果をここにまとめる。

英作文の難易度と満足度及びその要因に関しては、学習項目を除き、クラス間に有意差がみられなかった。これは、3段階の習熟度別クラスを実施したことで、難易度や進度が学生の学力により応じたものとなった結果だと言えよう。学習項目に関しては、中級クラスの評価が低かったが、基本的にはどのクラスも同じ内容を扱うことになっているため、クラス編成方法以外の要因がそこに働いていると考えられる。英会話においては、英作文と全く反対の現象が起こっている。学習項目を除く全項目で、クラス間に有意差が認められたのである。基礎クラスでは、難易度やレベルに関して低いという回答が、進度に関しては遅いという回答が適切だという評価を上回り、半数以上の学生が不満を持つという結果となった。

授業の理解、授業への参加、英語上達への効果、学習意欲の変化に関しては、全項目において、英作文ではクラス間に有意差がみられなかった。どのクラスにおいても、これらの全項目に関しては、効果が下がったという回答より上がったという回答の比率の方が高かった。英会話では、授業の理解を除く全ての項目において、クラス間に有意差があり、総じて基礎クラスの評価が低い。また、3段階編成による悪化点を挙げる学生に基礎クラスの学生が多かった。

英語力の上達感、伸びに対する満足度の2項目に関して、英作文及び英会話でクラス間に有意差がみられ、特に、英会話において顕著な差がみられた。伸びの程度に関しては、英会話でのみ有意差がみられた。これらの項目に関して、上級・中級ではいずれにおいても半数以上が3段階編成の効果を認めているのに対し、基礎では評価が低くなっており、特に英会話でその傾向が強くみられる。英語力の変化の要因としては、両科目において「教師」、「学習内容」、「自

分の努力」が大きく、クラス間に有意差はなかった。

習熟度別クラス編成の是非、必要性、編成方法希望とクラスとの独立性の検定結果では、英作文においては関係があるとは言えなかったが、英会話では習熟度別編成の是非と編成方法希望において関係が認められた。英作文では、どのクラスにおいても3段階習熟度別編成に対して肯定的な意見が多数を占めるのに対し、英会話においては、習熟度別編成の必要性こそどのクラスでも認めているが、3段階編成に関しては基礎クラスの評価が低い。

これらの結果から、英作文においては3段階編成が概ね効果的に作用しているが、英会話においては3段階編成が必ずしも好影響を与えているとは言えない。英会話の基礎クラスにおいて、満足度、授業への影響、英語力上達などに対する評価が低く、クラス編成希望に3段階編成を選択する学生も少なかった。したがって、英会話の基礎クラスに限って言えば、3段階習熟度別クラス編成により学習効果が減じたと感じる学生が多いと言えよう。今回の調査からはこの原因の特定は難しいが、基礎クラスに学力と所属クラスがミスマッチしていると思える学生が多かったことを考慮すると、プレースメントの不正確さがその原因の一つとして考えられるのではないだろうか。しかし、基礎クラスに学力と所属クラスが合わないと思える学生が多いのは英作文も同じであり、教科の違いにより英会話においてのみそれが影響したと果たして考えられるのか、或いは他の影響があるのかなど、今後更に調査が必要となろう。

今後の課題としては、今回疑問が持たれたプレースメントの妥当性の調査のために、アンケート調査で判明した学生の意識と学力との関係について分析することが必要である。また、今回部分的な分析しか行わなかった英語力変化の要因に関して、総合的に分析・考察する必要もあろう。また、本研究の調査対象となった学生は、1年前期には習熟度別編成を行わず、1年後期は2段階編成、2年前期は3段階編成と、様々なクラス編成を経験してきた。早急の課題としては、各学期毎に実施したアンケート調査の結果をまとめ、比較分析することが挙げられよう。それにより、習熟度別編成の在り方を模索する上で何らかの指針が得られると考える。

謝 辞

アンケートに回答してくださった学生の皆さん、アンケート入力に御協力頂いた大山祥子さんと松本さとみさんに感謝いたします。特に、統計解析を実施するにあたり、貴重なご助言を多数頂いた鹿児島大学理学部の宿久洋先生に深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 毎日新聞：平成13年8月25日
- 2) 朝日新聞社刊(2000)「大学ランキング 2001年版」朝日新聞社
- 3) 大阪女学院短期大学(1998)「自己検討誌・何ができて、何ができていないか」大阪女学院短期大学
- 4) 鳥飼久美子・進藤久美子(1996)「大学英语教育の改革」三修社
- 5) 立命館言語教育センター(2000)センターニュース 2000年7月 第7号
http://www.ritsumei.ac.jp/lc/clec_j.html
- 6) 田原良子・堀江美智代・竹内光悦(2001)「習熟度別クラス編成に関する考察(1)」鹿児島純心女子短期大学紀要 第31号

付 録 1

英語科2年生へのアンケート-2001年7月12日実施

このアンケートは、前期に開講された英文作成法Ⅲと英会話Ⅲのクラスについて、皆さんがどのように感じているかを調査するものです。各質問に対してあなた自身の考えに最も当てはまると思う選択肢を選び、その番号を解答欄に記入してください。特に指定のない限り、一つの質問に対して1個の選択肢を選んでください。名前を記入して頂きますが、個人の記入内容を記名で公表することはありませんので、率直な御意見をお聞かせください。このアンケートのデータは英語科の授業をよりよいものにするために使わせて頂きます。ご協力をよろしくお願いします。

- 1. ホームルームクラス:
- 2. 出席番号
- 3. 英文作成法Ⅲ教師:
- 4. 英会話Ⅲ教師:

I 下記の科目の授業についてどのように感じていますか。

- 1. 難しい 2. やや難しい 3. ちょうど良い 4. やや易しい 5. 易しい

- 5. 英文作成法Ⅲ: 1 2 3 4 5
- 6. 英会話Ⅲ: 1 2 3 4 5

II 下記の科目の学習内容に対するあなたの満足度はどうですか。またその理由としてレベル、学習項目、進度のそれぞれについて、あなたの考えに一番近いものを選んでください。その他の理由があれば、11,16の()に具体的に書いてください。

英文作成法Ⅲ

- 7. 満足度: 1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足
- 8. レベル: 1. 高い 2. やや高い 3. ちょうどいい 4. やや低い 5. 低い
- 9. 学習項目: 1. つまらない 2. ややつまらない 3. どちらともいえない 4. やや興味深い 5. 興味深い
- 10. 進 度: 1. 速い 2. やや速い 3. ちょうどいい 4. やや遅い 5. 遅い
- 11. その他: (具体的に:)

英会話Ⅲ

- 12. 満足度: 1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足
- 13. レベル: 1. 高い 2. やや高い 3. ちょうどいい 4. やや低い 5. 低い
- 14. 学習項目: 1. つまらない 2. ややつまらない 3. どちらともいえない 4. やや興味深い 5. 興味深い
- 15. 進 度: 1. 速い 2. やや速い 3. ちょうどいい 4. やや遅い 5. 遅い
- 16. その他: (具体的に:)

III 習熟度に応じて3レベルクラス編成をしたことについて、みなさんの意見を伺います。

- 17. 英文作成法Ⅲを3レベル編成にしたことにより、授業に関してなんらかの変化がありましたか。 1. はい 2. いいえ

18と19は17で「はい」と答えた人のみ答えてください。

- 18. 英文作成法Ⅲを3レベル編成にしたことにより、1年後期に比べて下記の点で良くなった。(いくつでも可)
- 1. 授業の理解度が上がった 2. 授業の進度が適切になった
- 3. 積極的に英語で発言しやすくなった 4. 学習内容が興味深くなった
- 5. 授業のレベルが適切になった 6. クラスの雰囲気に活気がでてきた
- 7. 周囲の学生から良い刺激を受けるようになった 8. 英語で書く力の伸びが大きくなった
- 9. 英語で書くことにもっと自信が持てるようになった 10. 何も良くなった点はない
- 11. その他:(具体的に→)

19. 英文作成法Ⅲを3レベル編成にしたことにより、1年後期に比べて下記の点で悪くなった。(いくつでも可)

- 1. 授業の理解度が下がった 2. 授業の進度が不適切になった
- 3. 自主的に発言しにくくなった 4. 学習内容への興味が減じた
- 5. 授業のレベルが不適切になった 6. クラスの雰囲気に活気が減じた
- 7. 周囲の学生から良い刺激を受けなくなった 8. 英語で書く力の伸びが小さくなった
- 9. 自分の英語で書く力に自信が持てなくなった 10. 劣等感を感じるようになった
- 11. 何も悪くなった点はない
- 12. その他:(具体的に→)

20. 英文作成法Ⅲを3レベル編成にしたことで、英作文力が上達したと感じますか。
 1. 感じない 2. あまり感じない 3. どちらともいえない 4. やや感じる 5. 感じる
21. 英文作成法Ⅲを受けて、英作文力がどの程度伸びましたか。
 1. かなり低下した 2. 少し低下した 3. ほとんど変わらない 4. やや伸びた 5. かなり伸びた
22. 英作文力が変化した要因を下から3つ選び、大きい順に書いてください。
 1. 教師 2. 3レベル編成 3. 自分の努力 4. 学習内容 5. 教授方法
 6. 教科書 7. 宿題 8. テスト 9. その他 ()
23. あなたは2年前期における英作文力の伸びに満足していますか。
 1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足
24. 総合的に判断して、英文作成法Ⅲを3レベル編成にしたことは良かったと思いますか。
 1. はい 2. いいえ
25. 英文作成法Ⅲは学生の英語力に応じたクラスが必要だと思いますか。 1. はい 2. いいえ
26. 25で「はい」と答えた人のみ答えてください。どのようなクラス編成がいいと思いますか。
 1. 1年後期のように上級クラスと普通クラスの2つに分けた習熟度別クラス編成がいい
 2. 2年前期のように上級・中級・初級の3つに分けた習熟度別クラス編成がいい
 3. 1年前期のように習熟度別編成を行わず、選択科目として上級英作文や基礎英作文などを開講した方がいい。
 4. その他：(具体的に：)
27. 26で選んだクラス編成がいいと思う理由を書いてください。
28. 25で「いいえ」と答えた人のみ答えてください。学生の英語力に応じたクラスが不要だと思う理由を述べてください。
29. 英会話Ⅲを3レベル編成にしたことにより、授業に関してなんらかの変化がありましたか。 1. はい 2. いいえ
- 30と31は29で「はい」と答えた人のみ答えてください。
30. 英会話Ⅲを3レベル編成にしたことにより、1年後期に比べて下記の点で良くなった。(いくつでも可)
 1. 授業の理解度が上がった 2. 授業の進度が適切になった
 3. 積極的に英語で発言しやすくなった 4. 学習内容が興味深くなった
 5. 授業のレベルが適切になった 6. クラスの雰囲気に活気がでてきた
 7. 周囲の学生から良い刺激を受けるようになった 8. 英語で話す力の伸びが大きくなった
 9. 英語を聞く力が伸びが大きくなった 10. 英語での会話にもっと自信が持てるようになった
 11. 何も良くなった点はない 12. その他：(具体的に→)
31. 英会話Ⅲを3レベル編成にしたことにより、1年後期に比べて下記の点で悪くなった。(いくつでも可)
 1. 授業の理解度が下がった 2. 授業の進度が不適切になった
 3. 積極的に英語で発言しにくくなった 4. 学習内容への興味が減じた
 5. 授業のレベルが不適切になった 6. クラスの雰囲気に活気が減じた
 7. 周囲の学生から良い刺激を受けなくなった 8. 英語で話す力の伸びが小さくなった
 9. 英語を聞く力が伸びが小さくなった 10. 英語での会話に自信が持たなくなった
 11. 何も悪くなった点はない 12. その他：(具体的に→)
32. 英会話Ⅲを3レベル編成にしたことで、自分の英会話力が上達したと感じますか。
 1. 感じない 2. あまり感じない 3. どちらともいえない 4. やや感じる 5. 感じる
33. 英会話Ⅲを受けて、英会話力がどの程度伸びましたか。
 1. かなり低下した 2. 少し低下した 3. ほとんど変わらない 4. やや伸びた 5. かなり伸びた
34. 英会話力が変化した要因を下から3つ選び、大きい順に書いてください。
 1. 教師 2. 3レベル編成 3. 自分の努力 4. 学習内容 5. 教授方法
 6. 教科書 7. 宿題 8. テスト 9. その他 ()
35. あなたは2年前期における英会話力の伸びに満足していますか。
 1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足

36. 総合的に判断して英会話Ⅲを3レベル編成にして良かったと思いますか。 1. はい 2. いいえ
37. 英会話Ⅲは学生の英語力に応じたクラスが必要だと思いますか。 1. はい 2. いいえ
38. 37で「はい」と答えた人のみ答えてください。どのようなクラス編成がいいと思いますか。
1. 1年後期のように上級クラスと普通クラスの2つに分けた習熟度別クラス編成がいい
2. 2年前期のように上級・中級・初級の3つに分けた習熟度別クラス編成がいい
3. 1年前期のように習熟度別編成を行わず、選択科目として上級英作文や基礎英作文などを開講した方がいい
4. その他：(具体的に：)
39. 38で選んだクラス編成がいいと思う理由を書いてください。
40. 37で「いいえ」と答えた人のみ答えてください。学生の英語力に応じたクラスが不要だと思う理由を述べてください。

Ⅳ 英文作成法Ⅲを3レベル編成にしたことで、1年後期と比べて何か変わりましたか。

41. 授業の理解
1. 分かりにくくなった 2. やや分かりにくくなった 3. 変わらない 4. やや分かりやすくなった
5. 分かりやすくなった
42. 授業への参加
1. 消極的になった 2. やや消極的になった 3. 変わらない 4. やや積極的になった 5. 積極的になった
43. あなたの英語の上達への効果
1. 効果が減じた 2. やや効果が減じた 3. 変わらない 4. やや効果的になった 5. 効果的になった
44. 学習意欲
1. 減じた 2. やや減じた 3. 変わらない 4. やや増した 5. 増した
45. その他の変化 (具体的に→)

Ⅴ 英会話Ⅲを3レベル編成にしたことで、1年後期と比べて何か変わりましたか。

46. 授業の理解
1. 分かりにくくなった 2. やや分かりにくくなった 3. 変わらない 4. やや分かりやすくなった
5. 分かりやすくなった
47. 授業への参加
1. 消極的になった 2. やや消極的になった 3. 変わらない 4. やや積極的になった 5. 積極的になった
48. あなたの英語の上達への効果
1. 効果が減じた 2. やや効果が減じた 3. 変わらない 4. やや効果的になった 5. 効果的になった
49. 学習意欲
1. 減じた 2. やや減じた 3. 変わらない 4. やや増した 5. 増した
50. その他の変化 (具体的に→)